

軍を忘れた誇り学ぼう

1980年代を中心に内戦に明け暮れた中央で、半世紀にわたって「非武装」を貫いてきた国コスタリカ。人口約370万人の小国だ。軍事支援のために自衛隊の海外派遣が始まったいま、映画や講演会などで、この国を紹介する動きが生まれている。軍隊がないことと民主主義を最大の誇りとする人々から何を学べるのだろうか。

根付いた民主主義 映画に

「コスタリカ 不正選挙をきっかけに、48年に内戦が勃発。翌年、常備軍を廃止する憲法が制定された。その後、数十回改正されているが、この規定は変わっていない。隣国ニカラグアの内戦の際も、本格的な軍備は持たず、83年に「永世非武装中立」を宣言した。中米紛争を和平に導いたとして、87年にアリアス大統領(当時)がノーベル平和賞を受賞している。

「日本と同時期に平和憲法を得て非武装を選んだ国を紹介することで、戦後直後の初心に帰ろう」。そんな思いから、作家の早乙女勝元さんが2年前に呼びかけたドキュメンタリー映画「軍隊をすてた国」の制作が、今月末の完成を目指して進んでいる。制作費約2500万円は早乙女さんの私費と募金でまかなった。スタッフ10人は6月、ロケのために約1カ月間、現地に滞在した。早乙女さんの娘でプロデューサーの愛さん(29)も出かけたが、勝元さんの思いとは多少異なっていた。「私たちの世代には『初心」

はない。憲法に焦点を当てては、セニョール、もう投票をすませた」と声をかけ、大人数を投票所まで案内する。中前の生徒会役員選挙でも、「政党」を作って即席の「党歌」を歌い、100人以上が

現地の大学院に2年間留学したアシスタントディレクターの足立力也さん(28)は、公園でくつろいでいた年配の男性の言葉が印象に残った。話を聞いていると、突然、「本当の民主主義は合衆国じゃなくここにある。だって軍隊と民主主義は矛盾するじゃないか」と語ったという。

「愛さんが驚いたのは、選挙歌」を歌い、100人以上が

「政治がスポーツのようになじんでいた」

監督は、20〜30歳代のスタッフの親の世代にあたる山本洋子さん(60)。「平和憲法をもつ軍隊のない国」にあこがれたが、現地に行くと、次第に「一人間」に魅せられたという。「武器がなければ、戦場に行く必要もない。のびのびと気ままに暮らしている人たちの姿を通して、軍を持たないことの豊かさを考えてほしい」と話す。



編集作業をする(左から)早乙女愛さん、足立力也さん、山本洋子さん—東京都新宿区で

コスタリカ

日本反核法律家協会事務局長の池田真規弁護士(東京弁護士会)は昨年9月、弁護士を中心に16人で訪問し、48年に軍隊廃止を宣言した当時の大統領の妻や平和運動を担う弁護士らに会

ラグアの紛争の際、コスタリカは、米軍から基地使用を求められたが拒否し、逆

訪問した弁護士 全国で報告会

に永世中立宣言をした。現憲法をなくせば、対等な立場で話し合えますよ」と説いたという。

池田さんはいま、毎月のように講演に呼ばれ、全国を巡っている。コスタリカ

「護憲運動は憲法を改悪されたらつぶれてしまう弱さがある。『九条を守れ』とだけ叫んでも仕方がないと気づいた。今まで想像もできなかった平和運動の新たな可能性を示してくれました」と話している。